

## 久しぶりの大相撲名古屋場所

## &lt;1&gt; 初日の印象 そして序盤戦

横綱照ノ富士はやはり万全ではない。腰・膝を中心とした下半身に余裕が見られない。

三人の大関の内、勝ったのは御嶽海だけだったし、勝った御嶽海の相撲にも安心できる要素は感じられなかった。この場所は、「大関の技量審査（リセット）場所」と成る可能性が大きい。

そしてもう一つ目についてのが、幕内の取組の中で「引き・叩き」などの逃げ手の決まり手が約半数を占めていたと言う点である。

力と力が対決することなく、自分から攻めて攻めきって勝つということではなく、相手の力をかわして相手に負けさせるという勝負が半分以上の取組で見られた。これでは観客が愉快地に思う訳がない。こんな取組ばかりなら、もう鑑賞する価値はないと思いつつ、序盤の推移を見守ることにした。

序盤（初日～五日目）の幕内の取組の決まり手をメモして、下表にまとめてみた。

	初日	二日目	三日目	四日目	五日目	合計	%
寄り切り	4	5	4	1	4	18	
寄り倒し				1		1	
押し出し	5	5	4	4	7	25	
押し倒し		1	1	2		4	
突き出し	2	1	1		3	7	
浴びせ倒し					1	1	
突き押し寄り	11	12	10	8	15	56	53.8%
上手投げ		2	3		2	7	
上手出し投げ				1	1	2	
下手投げ				1	1	2	
すくい投げ					1	1	
小手投げ		2				2	
首捻り		1				1	
とったり				2	1	3	
投げ	0	5	3	4	6	18	17.3%
引き落とし	3	2	2	1		8	
叩き込み	4	2	3	4	1	14	
送り出し	2		1	2		5	
突き落とし	1		1	1		3	
引き叩き等	10	4	7	8	1	30	28.8%
引き叩き率	47.6%	19.0%	35.0%	40.0%	4.5%	28.8%	

引き叩き等の「かわし技」が占める割合は、序盤五日間の合計で見ると約3割になる。中でも初日に多いのは、「白星でスタートして良いリズムを作りたい」という考えから「何であれ勝ちたいのだ」という力士の心理が現われているのだろうか。

多い日と少ない日があるものの、ほぼ30～40%の取組が「引き叩き」で終わっているということは、自分の力を出し切って敢闘していない力士が多いことを意味するのだろうか。

インタビュールームで良く聞くセリフ「自分の力を出し切って、一日一番精一杯やるだけです」とは裏腹な現象に、笑ってしまう。

## &lt;2&gt; 賜杯はどこへ

さて賜杯争いの方は今場所も、「総当たり大相撲トーナメント」の様相。さらに「コロナ感染者が出た

部屋は全員休場」の措置により、後半戦に入ってから取組数は減り取組編成にも異変が発生。御嶽海は早々と退陣、正代は辛うじて勝ち越しをして「地位が守れてほっとした」というコメントを発する程度のレベル。13日目に賜杯争いの表に名を残した大関は貴景勝だけとなった。

そして、中盤の二連敗もあり目立たない存在だった西前頭二枚目の逸ノ城が白星を伸ばして、いつの間にかトップに躍り出てしまった。これまでの場所のような、ボーッと立ち合いとヌーとした出足で、やる気があるのかどうかわからないような相撲が一変して、立ち合いに一步踏み込んで左上手を素早く引いて引きつける形が目立った。前頭二枚目の地位での12勝3敗の優勝は、通常だと来場所は一気に関脇に上がる可能性があるのだが、空席が出来なければ入れない。若隆景・豊昇龍・阿炎は勝ち越し、大栄翔は6勝6敗の状態を追手風部屋に感染者が出たことにより休場となり6勝7敗2休の成績。相撲協会は場所前に「コロナ感染者が発生した部屋に所属する力士は全員休場」というルールを打ち出した。その結果10人を越える休場者となったが、休場力士の番付編成上の取扱いについての検討はこれからだという。

逸ノ城の処遇ばかりでなく殆どの力士が影響を受けることになる。ルールを定めた時に、同時に番付編成上の取扱いも定めておくことが必要だった。逸ノ城については「張出し」を作って対応可能だろうが、その他の力士については混乱の可能性はある。後手に回ったと批判されても仕方がない。

誰でも優勝できる可能性がある時代になってしまい、それはそれで面白さはあるかもしれないが、積み上げられた成績によって序列を決める世界で、序列の持つ重みがなくなるのも興味半減である。

### <3> 今場所目に止まった力士

というような特殊な場所ではあったが、勝敗は別にして成長が感じられた力士の名をあげて見ると、豊昇龍・霧馬山・琴ノ若・若元春・翔猿・翠富士・錦富士。巨体を利して圧力をかけ続ける琴ノ若以外は、あまり大きな体ではないが、基本を押さえた技術が光ることと、矢継ぎ早の攻めという点で共通したものがあつた。こういった技巧派と言われるような力士たちが伸びてくると、「力士大型化」ばかりではない「もう一つの風」が吹いて来るようで、今後楽しみである。

### <4> まれに見る椿事

八日目に「史上まれに見る椿事」が起きた。

照ノ富士・若元春の取組で、若元春が果敢に攻めて横綱は窮地に追い込まれた。この時若元春のまわしが伸びきり、これに気がついた行司が「まわし待った」をかけた。

ところが、行司側を向いていた照ノ富士はこれに気がついて手を緩めたが、四つ身の関係で反対側を向いている若元春はこれに気付かず、相手の手が緩んだところを一気に攻め切ってしまった。

「まわし待った」は、取組中の力士のまわしが緩んだ時に行司が両力士に声をかけて「取り組んだままで静止」させて締め直しをするものである。

この取組の流れを細かく見ていると、行司が叫ぶ「まわし待った」の声がよく聞こえなかったことと、行司が両力士のまわしを叩いてこれを合図する動作が不完全で、若元春のまわしには手が触れているように見えなかった。解説の舞の海さんが「これは行司の動作の不手際」というような発言をしていたが、前代未聞の椿事である。

審判委員が土俵上に上がり長い協議の結果、ビデオ室が残した「まわし待った」の瞬間の静止画像を参考にして両力士の組み手を再現して再開することになった。テレビ機で見た限りでは、組み手の再現は今ひとつ正確ではなかったし、若元春の伸びきっていたまわしは固く締め直され、照ノ富士にとっては有利な状態になってしまい……。

翌日の新聞の報道を見ると、相撲協会の八角理事長の談話として「まわしはきちんと緩まぬように締めるべきだ」というコメントだけで、「まわし待った」の動作に関するコメントはどこにもなかった。昔は、立行司には懐剣を携え、命を賭して軍配を振る権威ある役職とされていた。近代に入ってからはいきわどい土俵際の勝負で差し違え等があると「進退伺い」が出されることもあった。

近頃は、稀に起きる「水入り」や「まわし待った」の時に処すべき動作が不十分と感じる事が多い。行司にとっても力士にとっても、稀に起きる出来事なので対処の仕方がわからなくなっているかもしれない。災害時の避難訓練と同じで「再認識」「再確認」「基本動作確認」などの対処は重要と感じる。

#### <5> やはり気になる決まり手分類

序盤に決まり手別分類をしてみたのでその後の推移が気になり、千秋楽まで調べてみることにした。投げ技の中にも正攻法からの技と奇襲策とがあるだろうし、突き落としの中にも立ち合いから意図的に行われた逃げ手もあれば、攻防の中で攻め手として出たものもあるので、厳密な分類は難しい。少々乱暴な分類ではあるが結果は下表のようになった。

	初	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	千	合計
寄り切り	4	5	4	1	4	5	5	5	4	6	6	5	1	5	5	
寄り倒し				1				1		3				1		
浴せ倒し					1	1										
きめ出し							1		1							
渡し込み											1				1	
四つ計	4	5	4	2	5	6	6	6	5	9	7	5	1	6	6	77
押し出し	5	5	4	4	7	4	4	6	4	6		8	4	3	5	
押し倒し		1	1	2		2	1	1	2							
突き出し	2	1	1		3	2		2						1	1	
突押し計	7	7	6	6	10	8	5	9	6	6	0	8	4	4		82
小計	11	12	10	8	15	14	11	15	11	15	7	13	5	10	12	169
上手投げ		2	3		2	1	1					1			1	
上手出投				1	1								3	1		
下手投げ				1	1	1		1			1					
掬い投げ					1		1									
小手投げ		2						1	1				2			
掛け投げ										1						
首捻り		1														
肩すかし								1								
とったり				2	1						1					
引っかけ										1						
足取り									1	1	1					
蹴返し								1								
外掛け												1				
小計	0	5	3	4	6	2	2	4	2	3	3	2	5	1	1	43
引き落とし	3	2	2	1		1						1	1	1		
叩き込み	4	2	3	4	1	2	4	2	3		4	1	1	1	1	
送り出し	2		1	2		1				2	1			1		
突き落とし	1		1	1		2	2		3		1	1		2		
小計	10	4	7	8	1	6	6	2	6	2	6	3	2	5	1	79
引き叩き	48	19	35	40	5	27	32	10	32	10	32	17	17	31	7	27
割合(*)	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%

\*引き叩き割合=不戦となった取組は対象としない 土俵上で戦った取組の中の割合を示す

四つ身からの投げ技や足技は、一昔前から見ると激減したように感じる。

上手投げと言えばあの力士、下手投げと言えばあの力士というように、名人芸に近い力士が存在した。

肩すかし・とったり・足取りなどは時々見ることができるが、内掛け・外掛けは少なくなった。  
寄りを主体とした決まり手の中では、吊り出しという技もあまり目にしなくなった。  
力士の体重が増えて（私は好ましくない傾向とみているが）160Kg がざらで 200Kg も珍しくなくな  
って大型化が一層進んできた。こんなことも決まり手の分類に現われているのかもしれない。

以上